

青年期の〈気分〉〈風景〉を捉えることを目指して

大倉得史
(九州国際大学)

1. はじめに～どんな「質」を問題にするのかを語っていかねばならない～

こんにちは、九州国際大学の大倉です。今日は、このようなワークショップに参加させてもらう機会を与えていただき、企画者の荒川さん、松本さんには本当に感謝しています。

と言いますのも、8月に九州大学で開かれた質的心理学会の最後に、「質的研究の質を問う」というシンポジウムが開かれましたが、そこでの議論に何か物足りなさを感じたからです。皆さんはどう思われたか分からないのですが、少なくとも私個人としては、壇上に上がった編集委員の先生方が、何をもって「質的」な研究だとみなすのか、現象のどんな「質」を大事にしていこうとしているのか、そこをこそ聴きたかったのです。

ところが、議論は論文における問いの立て方が明確であるかとか、誤字・脱字がないかとか、いささか表面的・形式的な論文の「質」を問うところまでしか行かなかった。どなたかがおっしゃっていましたが、そんな話なら別に質的研究に限らず、数量的研究にだって言えることで

1. 質的研究の「質」を問うとは？

- ・ 何をもって「質的」な研究だとみなすのか
- ・ 現象のどんな「質」を大事にしたいのか

→その点をこそ聴きたかった

質的研究の「質」を問うということの中身と必要性は本当に共有されていたのか？

す。「質的心理学の質を問う」ということの本当の中身と必要性がどこまで参加者に共有されているのだろうか、そんなふうな印象を受けたのです。

最近、さまざまな質的研究が、さまざまな方法を用いて行われています。ナラティブ・アプローチやエスノメソドロジー、グラウンデッド・セオリー・アプローチや仮説継承型

研究、さらには私がやろうとしているエピソード記述や語り合い法など、それこそ一般の方からすれば目眩に襲われるのではないかというほどの百花繚乱状態です。ときどき私も「質的研究をしたいんですが、どの方法を使えばいいのですか」とか、「エピソードをどうやって書けばいいのですか」とか質問を受けることがあります。そういう質問を受けるたびに「まずいなあ」と思います。

というのも、本来、研究アプローチというのは、どういったことを知りたいのかという問題意識と、扱うのがどういった領域であるかという対象の特質によって、決まってくるもののはずです。ナラティブ・アプローチにはそれ固有の問題領域と前提があり、エスノメソドロジーにはそれ固有の対象がある。自分の問題意識と対象に相応しい形で、アプ

本来、研究アプローチとは・・・

「どういったことを知りたいのかという問題意識
扱うのがどういった対象・領域であるかという対象
の特質

によって決まってくるもの

→それぞれのアプローチは、それ固有の問題領域と前提、対象を有している。

発想が逆転してしまっている・・・

「どのアプローチをとれば、どういったデータ処理の仕方をすれば『質的研究』になるのか？」

ローチを選び、ときには修正していかなければならないはずなのに、今の風潮では何か発想が逆転してしまっている気がするのです。「このアプローチをとっているから質的研究として認められるだろう」とか、「どういったデータ処理の仕方をすれば研究になるか」などと、まずどのアプローチにするかといったことが優先されてしまっています。これでは現象の質を真に有効な形で問題にしていくことはできません。

これからの質的研究は、各研究者がどういった問題意識に基づいて、どういったものを扱っていきたいのか、つまりは、現象のどのような「質」を問題にするのかを明示して、それとの関連性においてなぜそのアプローチをとるのか、その必然性を示していかなければならないように思います。

松嶋さんの本を読ませていただいたときに、すごいなあと思ったのは、丁寧にそれを実践されていたことです。「問題のある少年」という社会的現実がどのように形作られるのかということを考える際に、ちょっとした笑いや無視の意味を分析するエスノメソドロジーというのはかなり有力なアプローチなのだなということが、とてもよく分かる。松嶋さんが扱おうとしている現象の「質」というのは、どのような社会的現実が、どのような相互行為によって作られているか、それを細かく見ていくことに他ならないということが非常に

明確だと思っんです。

同様に、この前のシンポジウムでも、各先生方がその実践を行って、自らの扱う「質」がどんなものなのかを明らかにし、「質的研究」が扱う「質」にはどんな種類があるのかが分かることを期待していたのですが、私個人としてはちょっと残念でした。

ところで、今の話は当然、私自身に跳ね返ってきます。エピソード記述や語り合い法を用いると言うけれど、じゃあ、お前自身はどういった問題意識に基づいて、どういったものを扱おうとしているのか、というわけです。ところが、私自身、実は数ある質的研究との比較の中で、どういったものを扱っていききたいのか、なぜエピソード記述であり、なぜ語り合い法なのかといったことを、明らかにしてきませんでした。というより、自分の方法こそが現象の質を扱うための正当な方法である、ということを主張するばかりで、そうしたことをする必要を感じなかったのです。

しかし、やっぱり、そうではない。ここにおられる皆さんをはじめとして、やはり一人ひとり扱いたい問題や対象、つまりは扱おうとする「質」が異なっていると思うのです。だから、私は私なりに、現象のどんな「質」を扱っていかようとしているのか、それをはっきりさせなければいかんなあと思っているところに、ちょうどこのワークショップの話が舞い込んできました。「お前のフィールドワークとは何だったかを語れ」ということで、今日ここでお話することは、まさに今の私にとって非常に重要な意味を持っているのだと思っます。そういった意味で、荒川さん、松本さんに感謝したいなあと思っわけです。

- ・しかし、やはり一人ひとり扱おうとしている「質」は異なっている
- ・私は私なりに、現象のどんな「質」を扱っていききたいのかをはっきりさせなければ・・・
- ・「自分のフィールドワークを語れ」という機会 は、今の私にとって非常に重要な意味を持っている

2. 私のフィールドワークを支えた問題意識

さて、早速、私のフィールドワーク—どうもこの言葉は、自分の研究手法に馴染まないなあと思っのですが—のこれまでを、お話ししていききたいと思っます。

私は、自分のフィールドワークを、大きく3つに分けることができると思っます。

1 つ目は語り合いという方法を用いて、友人たちと会話をしながら、青年期という時期

を人がどんな生き方をしているのかを探ったもの。『拡散』という拙著にもまとめてある通り、これが私の研究の原点です。

それから、市内のとある精神科クリニックで非常勤の心理士として働きつつ、精神科デイケアにおける力動的な人間関係を考えてみようとしたもの。これは正直言って、未だに研究という形として公表することはできていません。指導教官の鯨岡先生の『エピソード記述入門』に、簡単なエピソードを書いたぐらいです。しかし、フィールドに入るときの研

究者の立場の問題や、エピソード記述の方法について、深く考えられるようになったのは、このフィールドワークがあったからこそだと思っています。

さらに、現在、地方の私立大学で教員兼学生相談室カウンセラーとして働きつつ、学生たちとさまざまな形で関わりながら、青年期という時期について考えようとしているもの。エピソードを取ってみたり、学生にインタビューをしてみたり、カウンセリングの面談記録を考察してみたりと、いろいろやっていますが、形になっているのは一本、紀要にひとりの学生とのエピソードを載せたぐらいで、あとはこれから徐々に形にしていければなあという状況にあります。

これらに通じる私の関心とは何だったのでしょうか。そのことを改めて考えてみるに、やはり私にとっては、一貫して、次のことが大きなテーマなのだと思います。すなわち「青年期のような人格形成の時期、あるいは心理的危機の時期の研究を通して、人間存在の成り立ちを考えること」です。一見、青年期研究とは無関係に見える精神科デイケアなどに出かけるようになったのも、このテーマと絡んで、精神病理に興味を持ったのが最初だったわけです。

ところで、このテーマの背後にあるのが、私自身が青年期に経験した激しい動揺—いわゆるアイデンティティ拡散—でした。あちこちで書いていますので「もうええわ」という人もおられるかもしれませんが、今日は、それをもう一度、話してみたいと思います。

2. 私の「フィールドワーク」

①友人たちと「語り合い」ながら、青年期を人がどのように生きているのかを探る

Ex)『ある対照的な2人の青年の独特なありよう』(質的心理学研究, Vol1), 『拡散—diffusion』(ミネルヴァ書房, 2002)

②非常勤心理士として精神科デイケアの人間関係の力動を考える

Ex)『二つのエピソード記述の比較検討』(鯨岡峻『エピソード記述入門』所収)

③教員 & カウンセラーとして学生と関わりながら、青年期について考える

Ex)『関係論的青年心理学のための一試論』(九州国際大学教養研究第12巻3号)

高校時代の終わりから、浪人時代、そして大学生活を通して、私はひどく不安定な心理状態にありました。自分がこれからどんな職業に就き、どんなことに価値を置いて生きていくべきなのかが決定できず、「ああでもない、こうでもない」と自問自答を繰り返す毎日が続きました。何か一つ、これを大事にしようと思ったことが、しばらく経つとどうしてもいいものになってしまい、また別の何かを大事にしたくなる、けれど、それも長続きしないという形で、結局何もできなくなってしまったのです。

来る日も来る日も考えましたが、思考は同じところを堂々めぐりするばかりで、不安と焦りだけが募っていきました。特に浪人時代、宙ぶらりんの身分のまま、一人部屋の中で頭をぐるぐる回転させているときに、本当にしんどかった。もういい加減、答えの出ない問いについて考えるのをやめて、受験勉強をしなきゃと必死で自分に言い聞かせるのですが、その一方で、この問題にけりをつけなければこれ以上先には一步も進めないような、そんな不思議な、重苦しい気分があったのです。

大学生活も後半になり、そうしたグラグラでバラバラな状態というのは、徐々にその動揺の幅を小さくしてきたように思いますが、そうした体験がいわゆるアイデンティティ拡散と呼ばれているらしいことを知ったとき、「あれは何だったのだろうか？」という問いが私の中に生まれたのです。アイデンティティ拡散とは何なのか。それは、なぜ生じるのか。そこを抜け出すにはどうしたら良いのか。だいぶ落ち着いてきたとは言え、そのことは当時の私にとってはまだとても切実な、「自分の問題」でもありました。だいたい、自分がなぜ落ち着いてきたのかも、さっぱり分かりません。そこで、エリクソンを一生懸命読んだのですが、どうも彼の記述の中には、現代の青年がどのようにアイデンティティ拡散を生き、またそこをどのようにして潜り抜けていくのかについての細かい描写、ないしは理論が欠けているように思いました。

こうして、私は青年期の心理的危機について関心を持つようになり、さらには少し勉強していくうちに、これが「私」や「自分」というものの成り立ちに関わるような、相当に奥の深い現象だということが分かってくるにつれて、その研究をすることに面白さを感じるようになってきました。

さて、こうして研究テーマが決まってきたときに、次に問題となるのがどのような調査をするかということでした。これまでお話してきたことから明らかなように、私の調査には、次の二つのことが求められました。

①アイデンティティ拡散がどのように始まり、どのように収束していくのか、そのプロ

セスを追えること。

②現代の青年たちがどのようにアイデンティティ問題を経験しているのか、できる限り、青年の日常性に近いところから掘り起こしていくこと。

もちろん、先行研究のように、半構造化面接等の手法を用いることも考えました。例えば、先行研究には達成型だとかモラトリウム型、拡散型といったアイデンティティ・ステイタスがどのように変化していくのかを探ったものや、就職活動を通して職業がどのように決められていくのかをモデル化したものなどがありました。けれども、これらには何かが決定的に足りないと思ったのです。一言で言えば、私の経験したあの激しい動揺や苦しい自問自答といったものが、先行研究には影も形もないのです。見えてくるのは、青年の生の姿ではなく、いかにも科学然としたモデルでした。

次のように言い換えることもできます。私が知りたいのは、現代の青年がどのような＜気分＞で、どのような＜風景＞を見ているのか、ということでした。拡散の嵐の中で、目の前に広がっていた一種独特の＜風景＞、何とも言えない、不安で、追い詰められた＜気分＞、私はそうしたものの中で青年期を過ごしてき、ふと気づけばその＜風景＞や＜気分＞がいつのまにか少しずつ変わっていたのです。そうした＜風景＞や＜気分＞がどのようなものであり、それがどのようなプロセスで変容していくのか。私が知りたいのはまさにそのことだったのですが、先行研究では、逆に研究者の側から見た対象としての青年、青年の生を研究者の視点から単純化したモデルといったものしか出てきていないように思ったのです。

私には、半構造化面接といった手法が、そうした傾向の一因になっていると思われました。研究者サイドが予め質問を用意して、聴きたいことを聴くというのでは、青年から見た＜風景＞や、彼らが漠然と抱いている＜気分＞といったものを扱うことはできないのではないかと。むしろ、青年たちと同じ場所に立って、同じような＜風景＞を見、同じような＜気分＞を味わうことから、すべてを始めていくしかないのではないか。これが、友人た

現代の青年が、どのような＜気分＞で、どのような＜風景＞を見ているのか

- 拡散の嵐の中で、目の前に広がっていた一種独特の＜風景＞
- 不安で、追い詰められた＜気分＞
- それがいつのまにか少しずつ変わっていくことの不思議



その＜風景＞や＜気分＞を捉え、それが変容していくプロセスを追うこと

(研究者の側から見た「研究対象」としての青年、モデル化され、単純化された青年の生ではなく…)

ちととりとめもなく、自由に会話をするという「語り合い」法を、私がとった理由だったわけです。

3. 試行錯誤の末、たどり着いた語りの考察方法

さて、ここまで聴くと、いかにも「語り合い」という方法が、青年期の問題を青年の視点から扱っていくために有効だという感じもするかもしれませんが、もちろんそんなにうまくいくはずがありません。この前、ある先生にも言われましたが、要するにただ「くっちゃべっている（おしゃべりしている）」だけなのです。これをどう考察するのかということが大変に難しかったのです。

まず、卒業研究では逐語録を並べておいて、例えば「父親のように人のことを考えられる人間になりたい」という言葉が出てきたら、「彼は父親に同一化を向けている」といった分析をしたりしました。しかし、これは、それを語っている青年がどのような＜気分＞で、どのような＜風景＞の中を生きているのかを明らかにする考察というよりは、むしろ同一化群、あるいはそれを統合する自我といった従来の概念装置で、語りをバサバサと切っていくようなものになりました。結局、研究者サイドの視点から、研究対象としての青年の語りを整理していくという構図に陥ってしまったわけです。

考えてみれば、これは当たり前のことです。というのも、青年たちの＜気分＞や＜風景＞といったものは、多くの場合、言葉として語られるものではなく、そうした言葉の端々やその場の雰囲気といったものから何となく感じ取られるもの、匂ってくるものです。逐語録だけをいくらひっくり返したり、細かく見ていったとしても、語りが全体として伝えてくるような＜気分＞や＜風景＞といったものを捉えることはできないのです。エスノメソドロジーやナラティブ・アプローチでは、かなり細かい逐語録分析が行われますが、私がそうしたものと一線を画そうとするのは、そうした理由からです。

次に修士論文では、逐語録以上に、語りから立ち現れてくる青年たちの生きている＜風景＞というものに迫

・なぜそうってしまったか？

青年たちの＜気分＞や＜風景＞は言葉として明瞭に語られるものではなく、往々にして、その言葉の端々や場の雰囲気などから「感じ取られるもの」、「匂ってくるもの」



逐語録だけをどれほどひっくり返したり、細かく見ていっても、語りが全体として伝えてくる＜気分＞＜風景＞は捉えられない
(エスノメソドロジーやナラティブ・アプローチと一線を画す理由)

ろうとしました。＜居住自己＞の喪失や、＜投げ出され体験＞、＜他の場＞の否認といった、青年の＜風景＞に関する概念装置に行き着いたのも、この頃です。拙著の中で行った考察と大筋では同じ考察を行ったのですが、これに関しては周りから「誰が語っているのか分からない」という評価を受けました。どういうことか。例えば、修論ではこんな考察がなされています。お手元の資料をご覧ください。

(修士論文と拙著『拡散』の考察の比較については P31 以降の資料を参照)

今日は拙著で同じ語りをどのように分析したのかを呈示する時間はありませんが、手元の資料に載せてありますので、良かったら後ほどご覧ください。それと比べてみると、修士論文での考察というのは、やはりまだ須賀君を対象化しすぎているし、「彼は～なのである」といった口調はとても分析的だし、そして、須賀君の語りを聞いている「私」がどういったスタンスで、どういったことを感じながら聞いているのかが明らかではない。むしろ「私」は、須賀君の語りをやや超越的な位置から語り直す「代弁者」のようですらあります。ここが、周りから「須賀君が語っているのか、それともあなたが語っているのかが分からない」と言われた原因だと思います。

こうした段階を踏まえて、私は私自身の体験を積極的に記述に盛り込んでいくようになります。はじめは抵抗がありました。私は須賀君の語りの考察をしているのであって、私自身の体験をひけらかそうとしているわけではない、そんな気分がありました。けれど、非常に重要なことは、次のことだったのです。須賀君の話を聞いていた私自身がどのような経験の持ち主であり、どんなことを感じながら、彼の語りを聴いていたのかを呈示しなければ、読者には彼の語りがどのような雰囲気を持つものだったのかが了解できないということです。読者が記述してほしいと思っているのは、須賀君の語りについての分析的説明ではなく、むしろその説明の妥当性を検討しうるような材料、つまりはその語りに彼のどのような＜気分＞が滲み出ていたかということそのことなのです。

その＜気分＞は、まず、語り合いの現場にいた「私」に感じられてきます。そうやって「私」の中に喚起されてきたものを、まさに「私」にそう感じられたと明記しながら記述することで、読者は「私」を通して、須賀くんの語りの雰囲気というものを肌で感じ取れるのだと思います。ここから私は、記述する＜私＞が、当時語り合いの現場にいたときの「私」の身体感覚をもう一度よく味わいながら、その場にあった＜ある感じ＞を言葉にし、

何とか読者に表現していくということが、いわゆるメタ観察の核心であると位置づけました。

私にとっての質的研究とは、記述する<私>と現場を生きていた「私」のあいだの往復運動によって、その場の雰囲気やそこを生きていた人たちの「ありよう」ないしは「人となり」、語りから滲み出ていた独特の感じ、つまりは語り合いの<質感>を描き出し、そこから青年たちが生きている<気分>や<風景>についての理論を導いていくことだったわけです。

「私の」質的研究とは

- 記述する<私>と現場を生きていた「私」のあいだの往復運動によって、
- その場の雰囲気やそこを生きていた人たちの「ありよう」「人となり」、語りから滲み出ていた独特の感じ—つまり、語り合いの<質感>—を描き出し、
- そこから青年たちが生きている<気分>や<風景>についての理論を導いていくこと

4. 二人との相違

今日は、松嶋さんと松本さんとの立場の相違を明確にしながら話すように、という命を受けていますので、ここまでの議論を少し整理しておきたいと思います。

まず松嶋さんとの相違ですが、それは先ほどの語りを見てもらえば明らかだと思います。須賀君はここで「俺は俺だというのに意味はない」という言葉をさかんに繰り返しながら、何か言葉にするとするとえらく難しいある感覚を語ろうとしています。ところが、結局、言葉にすることができていないために、もしこの逐語録だけを考察の対象にするのであれば、彼の語ろうとした<気分><風景>に迫ることはできなくなってしまいます。しかし、その場にいた「私」にとって、彼が言葉にしようとしてできないその<気分>というのは、むしろ彼が何度も何度も同じ言葉で行き詰ってしまう、その行き詰まり方によってこそ、何かとてもよく分かる感じがしたのです。そして、実際に、「もしかしたらその感覚というのは『俺って不安定やけども「俺は俺だ」っていうところで、かろうじて「俺である」っていうのを保ってる』という言い方ではどう？」と提案し、彼もそれに同意してくれています。

私が読者に提示したかったのは、まさにそこで私に了解された彼の<気分><風景>でした。それが、本当に須賀君が生きていた<気分>や<風景>なのかと考え出せばいろいろ

ろな難問—「他者理解」や「＜気分＞の实在性」についての—が生じますが、少なくともそうすることで私は、語り合いというものが行われていた意味の水準、明確には言葉にならないその独特の＜気分＞がいかなる類のものなのかといったことは概ね示しえたのだと思います。

これは恐らく、逐語録を微視的に見ていくエスノメソドロジー的手法では切り込むことのできない領域でしょう。そもそもエスノメソドロジーで問題にされるのは、あくまで相互行為をする当事者たちのあいだで、どのように社会的現実が作られていくかということです。本来、さまざまな個人的な思いが込められている語りに対して、逐語録レベルの分析で事足りるのも、このエスノメソドロジーという方法が言葉の社会的・一般的な意味水準に照準を絞っているからです。

しかし、その一方で、私はといえば、何も私と須賀君のあいだで「アイデンティティ」という言葉の意味がどのように構成されていくかを見ようとしているわけでもなければ、「語り合い」という一つの調査方法がどのように維持されているのかを見ようとしているわけでもありません。思い切って言ってしまえば、私が問題にしたいのはあくまで須賀君の生きているアイデンティティ体験です。言語によって構築される社会的な現実というよりは、むしろ個人的で前言語的な、彼の生きる＜風景＞であり＜気分＞なのです。

松嶋さんの言うておられることには、私は一つひとつ共感を覚える点も多いし、エスノメソドロジー的視点を用いてときどき「語り合い」を振り返ってみることは、有効なヒントを与えてくれるだろうとは思いますが、しかし、この方法が目指しているのは本質的に別のものだということになります。

次に松本さんとの相違点ですが、これは二番目のメタ観察の議論に関わるものです。しばしば松本さんとは議論になるのですが、松本さんはメタ観察という作業があまり好きではないようなのです。ところが、先ほどから述べている通り、語り合いの＜質感＞を描き出していくためには、どうしても当時の「私」に漠然と感じられていたもの、何となく了解されていたものをはっきりと意識化し、主題化し、記述していかなければなりません。私にとってはこれがメタ観察の核心であり、そこにいた人々の「ありよう」や「人となり」、その場の雰囲気を描き出していくコツなのです。ここはどうしても譲るわけにはいかないのです。

ところが、松本さんは、＜私＞と「私」という区分が気にかかるというんですね。記述する＜私＞が当時の「私」を振り返るというけれど、当時の「私」だって、今ここで想起

されている記憶である以上、今の＜私＞とは区別しようがないではないか、といったことをおっしゃいます。いや、確かにそうだと思います。

ただ、私がここで主張している区分というのは、時間的なものというよりは、対他的なものとも言えるかもしれません。すなわち、須賀くんを目の前にして語り合いを行っているときの「私」と、今、読者に向けてそこでの語り合いの＜質感＞を表現しようとしている＜私＞です。前者はある身体感覚として残っているものであり、後者の＜私＞は、ある程度、理性的なレベルで、文章を用いて、読者にそれを表現していきます。私が言っているのは、そうした区分を用いることで語り合いの＜質感＞を主題化し、意識化しやすくなるよという方法論・技術論なのであって、過去の「私」が今ここで実在するか否か云々とといった話とは違ったレベルの話なのです。

あと、一つ面白いと思ったのは、松本さんはお年寄りたちと一緒にいるときに、「いつも僕はもっとボーっとしている」と言うんです。拙著の中のメタ観察で私がやったように、いかにも内省的にあれこれ考えないと。松本さんは、もっとボーっとしているそのときのあり方そのままに、その場がどういう場であるかを描き出したいというんですね。これを聴いて、なるほど、もしかしたら青年期と老年期という対象の違いによって、ふさわしい記述のスタイルは変わってくるかもしれないなとは思いました。ただ、例えそうだとした場合、何らかの形で現場にいた当時の「私」の身体感覚を軸にしなければ、その場の＜質感＞は描き出せないだろうというのが、私の見解ではあるのですが。

5. 現在の問題

さて、最後に、こうした語り合いという方法の練り上げをしてきて、現在私にとってどんなことが問題なのかをお話ししておこうと思います。

現在、私は大学で教員あるいはカウンセラーとして、学生たちと関わる立場にあります。その中でしばしば感じるのは、青年期というのはなかなか捉えどころがないなあということです。友人たちとの語り合いによって、青年期特有の心の動きをある程度つかまえたつもりでいたのですが、全然そんなことはないですね。「ああ、揺れているなあ」ということは何となく分かるんですが、その具体的な現れ方というのは一人ひとり違う。いろいろ考えているのかなという学生もいるし、ただその揺れに圧倒されてボーっと過ごしているような学生もいます。その一方では、驚くほど前向きで、楽しそうな学生もいます。

正直言って、彼らの内面世界が、よく分からないことが多いんです。教員ないしはカウ

ンセラーとして関わるという立場の違いもあるでしょう。言語化能力の非常に高かった京大生との違いもあるかと思います。また、私たちの頃とは少し違った現代青年の特徴もあるのかもしれませんが。とにかく、昔ほどは、ずっと青年の話に共感できなくなった気がしますし、「ああ、いかにもまだ子どもだなあ」などと自分が学生の頃に聴いたら激怒するような感情を抱くこともあります。

自分の中では、今まで内側から見ていた青年を、外側から見るようになった気がしています。もちろん、これは悪いことではなくて、この内側と外側がどうやってつながるのかを考えていくことが、青年期をより立体的に理解するために必要なことだと思います。

ただし一つ非常に重大な問題があります。以前は、青年期の〈気分〉

や〈風景〉を何とか取り押さえることは、すなわち「自分の問題」に収まりをつけるためにも必要なことだった。すごくパトスがかった気がするんですね。ところが、だいぶ揺れも収まってきた現在、自分は何のために青年たちを了解しようとしているのか、ときどき分からなくなるのです。こんなこと言ったら研究者として失格なんですけど、どうも以前ほど強烈な問題意識が湧いてこない。一体、なんでだろうと、最近考えているのですが、今日お話ししてみて、少しだけ原因が分かった気がします。

冒頭にお話ししたようなかねてからのテーマ、「青年期のような人格形成の時期、あるいは心理的危機の時期の研究を通して、人間存在の成り立ちを考えること」というテーマと、最近の実践はだいぶ縁遠くなってしまったなと思うのです。教員やカウンセラーとして学生たちと接してみても、なかなか人間存在の成り立ちの話にはなりません。テーマを変えることになるのか、フィールドを変えることになるのか分かりませんが、これは今の私が乗り越えねばならない問題だと思っています。

以上、中途半端ですが、私がやってきたこと、そして現在の状況についてお話ししてきました。舌足らずなところが多々ありますが、ご質問等いただければ私自身にとってもありがたいです。よろしくお願いします。

5. 現在抱えている問題

- 教員 & カウンセラーとして関わっていると、「青年期は捉えどころがない」と思う
- 「ああ、揺れているなあ」とは何となく分かって、その現れ方はそれぞれ違う
- 正直、彼らの内面世界がよく分からない(立場の違い? 言語化能力の違い? 現代青年の特徴?)
- 昔ほど、ずっと共感できなくなった気がする
- 今まで内側から見ていた青年を、外側から見るようになった気がしている

→この内側と外側がどうつながるのかを突き詰めることが、青年期を立体的に理解するために重要

資料 修士論文と『拡散』での考察の比較

語り 須賀(4回生・秋)—無意味な「俺」—

(須賀) 何を考えても中途半端なんだよな、俺は、多分。中途半端、中途半端なんだよ、何を考えても。でもね、中途半端って、それはいいとか悪いとかじゃなくて、中途半端にならざるを得ないんじゃないかっていう・・・何て言うかね、こういう考えをしてたらっていうかさ、中途半端にならざるを得ないんじゃないかねって、何となく分からんかね？

(僕) もうちょっと具体的に・・・。

(須賀) 具体的にか、ちょっとうまく言えないんだけど、中途半端を肯定するわけじゃない、それでいいんだっていうわけじゃないんだよ。けどね、それは野球の話でもさ、まずもって複雑なわけじゃない？

(僕) 何が？

(須賀) その、そもそも野球っていうのは何なのかって考え出したりするとさ、何だろうって。分かりっこないやん。野球って何なのかって言ったって分かんないでしょう？

(僕) うん。

(須賀) 野球っていうのは、野球じゃない？そこがこう、固定しないから、こう、方向をつけたときに、こう遡っていくと、何て言うかな、遡り切れない？

(僕) ああ、うん。

(須賀) というのかさ、野球の話で言ったらそうなんだ・・・教師というのとは何なのか・・・まあ、俺っていうのが何なのかっていう話なんかな。俺っていうのは何なのかっていうのは、もう俺以外の何者でもなくてさ、確定しないっていうかさ・・・俺っていうのは俺だっていう、そこに意味もくそもないんだよね。ないことない？

ないっていうかさ・・・俺っていうのは俺なんだっていうのに、それ以上の意味はないというかさ・・・それ以上に意味はなくてさ・・・そのことに意味があるかって言ったら、ないっていうかさ・・・ないんじゃないかなあと思って・・・。

(僕) その「俺は俺だ」という「俺」は、つまり「非常に不安定で」ってこと？

(須賀) というか、ここにこうして在るっていう俺・・・何て言うかな・・・それ、ちょっとよく分かんないんだけど、うまく言えないというか・・・よく分からないんだけど・・・。

(僕) こういうふうに分かったらどうかな、「俺って不安定やけども「俺は俺だ」っていうところで、かろうじて「俺である」っていうのを保ってる」というか・・・。

(須賀) ああ、そうだね。そっちの方が合ってるね。うん、ああそうか、そうか・・・。

【修士論文での考察】

ここで見るように、須賀にとっては「俺」ないしは「自分」や「私」といった言葉が通常もつ、「生き生きとした実体的なまとまり」という感じが失われてしまっている。彼が言っている「俺は俺だ」は、アイデンティティの感覚が説明されるときによく言われる「自分が自分である感覚」などとは全く異質なものである、というより、明らかにその対極にあるものである。

彼にとっての「俺は俺だ」という言葉は、決して充溢感や一貫した感覚などを表現するものではない。むしろ、それとはまったく逆に、空虚で、不安定な「自分」、「どこにもいない」ような「自分」を「俺は俺だ」と言うことによってかろうじて「俺」という言葉につなぎとめている、そんな感じなのである。かろうじてつなぎとめてはいるが、その「俺は俺だ」という言葉にはまさに単にそれだけの機能があるのみであって、そこには全く「意味」がない。

通常「俺」という言葉にまとわれているはずの意味内容がすべてそぎ落とされており、「俺」という言葉と「俺」という言葉が虚しく連結しているだけの「俺は俺」。そんなつながりは極めて脆いものである。そんなつながりはいつ崩れてもおかしくはない。「俺」は「俺」であるが、そうでなくとも良いのかもしれない、という不安。世界のあらゆるものとの関係から切り離され、自分の身体感覚からも切り離された「俺」は、世界の「どこにもいない」ような「俺」は、もはや何であつても良いのかもしれない、いや何でもないのかもしれない。「俺」が「俺」である必然性がない、「意味」がない。

「俺」というのは何なのかと聞かれれば、「俺」という言葉で返すしかないほどに、あまりに不確定で、あまりにあやふやで、「俺」という言葉の内容として一貫した何かを認めることができない。だとしたら、残るのは、「俺」という言葉（シニフィアン）だけである。内容を持たない、「意味」（シニフィエ）をもたない、シニフィアンとしての側面だけしか残らない言葉。ただ「オ・レ」という音だけが虚しく響く「俺」と、全く同じように虚しい「俺」。

（修士論文『「アイデンティティ」再考』p89）

【『拡散』での考察】

「俺っていうのは俺だというのに、それ以上の意味はない」という言葉の繰り返しの中で、彼はもう少しで言葉になりそうな、けれど実際言葉にするとなるととても難しい何か

を言おうとしているようだった。うんうんと考え込みながら一生懸命言葉にしようとするのだが、どうしても最後の一言が出てこない感じだった。そこで、僕が提案した「『俺は俺だ』っていうところで、かろうじて『俺である』っていうのを保ってる」という言い方は、彼にとってもびったり来るものであったようで、彼は「ああ」と思わず声が漏れたという感じで同意してくれた。

＊

先にも述べたとおり、僕は当時目の前に広がった選択肢の多さに圧倒されてしまい、自分がどういった職を目指していくのかを決めかねていた。どの職業も一長一短であるように見え、何とかその「一短」がない職業、いやそこまで言わずとも、他の職業に比べて「一長」がより大きく「一短」がより小さい職業はないものか色々考えていた。今から見ればかなり誇大的で、とても気恥ずかしいのだが、そのころ書いていたノートからある日の一節を引いてみる；

「(偉人を目指して)すべてを投げ出し一つに集中する。一時の快楽、人を助ける喜び、さらには科学する喜びさえ捨てても俺は科学するのである。

A 自分の好きなことをやれば良いだとか、人助けは思いあがりだとか、一つに集中すれば何をやっても良いのだとか、結局言い訳ではないのか。苦しんでいる人がいるんだ。学者に何ができるというのだ。真理とか言って自己満足しているだけじゃないか。

B では、何が人助けになるというのだ。政治家か？医者か？弁護士か？彼らがどれだけの人々を救っている？不幸な人を救ったのは何よりも、生活の水準を高めてきた科学なのだ。だからといって科学者が偉いと言っているのではない。ただ、軽蔑されることがあってはならないと言っているのだ。貢献度は仕事の種類に無関係だ。

A では、科学が人類を不幸にしているとしたら？現代文明社会と昔とでは、必ずしも現代の社会が良いとは言えないね。

B じゃあ、君は飢えや病気で数え切れない人々が死んだ昔の方が良いとでも言うのか。不幸の量はやはり減ってきたんだ。科学によってね。現代の問題も慎重に科学を進歩させていけば解決できると思うよ。

偉人とは目指すだけの価値があるものなのか。何で偉人になりたいのか。苦労ばかりが多いだろう。一生懸命生きなきゃと思って、この苦労の道を選んだけど、そうすることが一体何になるのだろう。人生には楽しみもあるはずだが、では偉人の楽しみとは？」

あまりに何も決まらない状況から何とか抜け出そうと、「すべての楽しみを放棄して自

分は科学者になる」ということを懸命に宣言しようとする。けれども、そこでどうしても出てくる科学への疑問。何とか頭の中を整理しようと、弁証法的な対話を作り出して科学の長所を証明しようとする。そして行き詰まる。結局「すべての楽しみを放棄して」というそもそもの前提が揺らいでくる。自分はどう生きたいのかというところから出発して、科学というものに自分を没入させていこうとするが、科学とは何なのかということが確定できずに、最後にはまた自分はどう生きるのか―「楽しみ」がなくて良いのか―というところに立ち戻っていく。思考を突き詰めていった結果、例えば「科学は良いものだ」という結論が確定すれば、自分は安心してそこに飛び込んでいけるだろう。けれども、科学にしろ何にしろあらゆるものの根本が確定しないし、最終的には自分がどう生きたいのかが確定しないから、思考はふらふらと同じところをめぐっていくばかり。どうにもこうにも「遡り切れない」感じ。そんな「中途半端な」ままでは、やはり何かに没入していくことなどできない気分。

＊

須賀は野球が好きだった。企業へ就職しても会社のため、社長のためにこき使われるだけだという彼にとって、唯一可能性として思い浮かんだのが暇の多そうな（と彼が言う）高校教師だということは、前にも述べた通りだが、そのもう一つの理由というのが、野球部の顧問になって野球にずっと関われば楽しいだろうなということだった。ところがその一方で、野球というスポーツの持つ悪しき側面というのが、彼の中で大きく引っかかっているようだった。彼は次のように語ったことがある。

「やっぱり競技スポーツというのはおかしいということになるんだよ。あんなのはまず競争するもんだということとを植えつけるっていうかさ、勝つことが重要だっていう前提がもう当然あるわけじゃない？で、しかも俺の中ではつながっちゃってるんだけど、甲子園で日の丸掲げてなかったっけ？それとかさ、監督の言うことは絶対、先輩の言うことは絶対っていう軍国主義やん。でも実際野球好きだし、ピッチャーの投げる球打って、ここぞという場面で打って、味方が勝つことが面白いしさ。というね、自分に矛盾を抱えちゃうんだけどね。だから野球なんてやるもんじゃないんだ、おかしいんだってなるんだけど、でも実際やらないかって言ったらやりたいわけさ。っていうね、高校教師になることも色々大変だなんていう矛盾を抱えちゃうんだよね。」（4回生・秋）

このように彼もまた、「野球がやりたい」ということを根本に固定することができず、野球とは何か、自分は一体何がやりたいのかといったことを問い続けていたのだと思う。

そして、いつまでも同じところを回り続ける「思考の迷路」の中で、結局行動を起こせず、とてももどかしい思いをしていたのだと思う。

彼や僕が見失っていたものは何だろう。恐らくそれは、すべての行動や思考の支点となるような根本的なもの、すなわち「自分」である。野球とは何であるか、良いものなのか悪いものなのかを決定する「自分」。あるいは、野球がやりたいのか否かを決める「自分」。結局そうした根本的な「自分」がはっきりと確定しないがゆえに、野球が良いものなのかどうかも分からないし、本当にそれがやりたいのかも分からない。「野球なんてやるもんじゃないんだ、おかしいんだ」という「自分」と、「実際やらないかって言ったらやりたい」という「自分」。かと言って、本当にやりたいのかと問われれば、それにも自信を持てない「自分」。そんな「ふらふら」した「中途半端」な「自分」を何とかしてどこかに固定したいと思うが、なぜかどうしてもそれが適わない。

「俺は俺だ」と言ってみる。けれども、その「俺」という言葉が指し示す何者かは、「ふらふら」し「中途半端」で非常にあやふやである。「俺」という言葉の「意味」が一つに定まらない。にも関わらず、その何者かはやはり「俺」という言葉で名指すしかないものでもある。「俺は俺だ」と言ってみる、というより、そう言うしかない。けれどその言葉は、本当はばらばらなものを無理矢理一つの言葉で名指しただけのような感じもする。確かにそれらすべてが「俺」なのだけれど、だとしたら「俺」って一体何なのか。「俺は俺だ」という言葉には、ばらばらな何かを一つに取り繕う接着剤のような機能があるだけであって、そこにそれ以上の「意味」はない。

僕は彼の言葉をそんなふうに聞いていた。だから、上の語りでも「俺って不安定やけども『俺は俺だ』っていうところで、かろうじて『俺である』っていうのを保ってる」という表現を彼に提案したのだ。彼もそれを理解したようだったし、彼の言わんとしていたことの一つの側面は確かにそういうことなのだろう。

＊

「俺は俺だ」というのにそれ以上の「意味」はない—この言葉についてもう少し考察しておこう。

彼や当時の僕には、社会の中での身分がなかった。もちろん、彼は「学生」であるし、僕は「浪人」だったわけだけれど、僕たちにとってそれはまったく不十分な身分だった。彼はまわりの学生のように普通に卒業して、普通に就職していくことを拒んでいたし、僕も普通の浪人らしく受験勉強ばかりをするのだけは嫌だった。他人から見れば、どちらに

してもやはり「学生」や「浪人」だったわけだけれど、恐らく僕たち自身はそのレッテルを拒んでいた。いや、単に拒んでいたというよりは、早く「学生」や「浪人」を脱却し、それとは異なった何か、それ以上の何かになろうと懸命にもがいていた。少なくとも、彼も僕も「学生」や「浪人」といった社会的身分に「安住」してはいなかったのである。

だから、僕たちに突きつけられていたのはまさしく「自分とは何なのか？」という問いだった。通常僕たちは、「自分は〇〇だ」という〇〇の部分に、さまざまな言葉をあてはめることができる。例えば、僕は「大倉得史」で「日本人」である。性別は「男」で、現在「27才」であるにも関わらず、まだ「学生」をやっている。「将来は研究者になるかもしれない」が、心のどこかではまだ他に何かないか探してもいる。アルバイトで「塾の講師」をしたり、「酒好き」で友達とよく飲んだりしながら、割と忙しい日々を送っている。性格は「優柔不断」でありながら「我が強い」気もするし、自分でもよく分からないところがある……。というように、一つ一つ言葉にしていくときりがないのだが、それでもこうしたある程度社会的な意味を持つ言葉が一つの全体として織り合わされていることで、僕は僕という存在にそれなりの一とても有意義で、隅から隅まで一貫しているというわけではないにせよ、それなりに有意義で、それなりに一貫した—「意味」を感じることができている。

対して、須賀や当時の僕には、こうした言葉が欠乏していたと言える。もちろん、名前、国籍、性別、年齢といったあたりまでは問題ないだろう（一方では、民族的アイデンティティやジェンダーアイデンティティに関する多くの研究が示唆するように、国籍や性別の問題で悩む人もいる：鑪・山本・宮下、1984）。けれど、上に述べた理由で、「学生」だとか「浪人」だとかいった現在の社会的身分を表す言葉が、果たして自分を適切に指し示すものなのかは相当怪しかった。さらに、自分が将来何になれば良いのかということや、それになるために自分が今どのように生活すべきなのかということはまったく決まらなかったし、一体自分は何が好きなのかということさえもはっきりとはしていなかった。このように、自分を指し示すものとして安心して引き受けられる言葉がほとんどないということ、当然それは自分が身にまとっている意味群を貧困にし、ひいては自分が「意味」ある存在であるという感覚を弱めることにつながるだろう。

もちろん、僕という存在の「意味」がすべて社会的な意味に回収されてしまうわけではない。「自分は〇〇だ」と色々言葉を挙げ連ねているときでも、僕たちはそうした〇〇をいくら積み重ねても言い表すことのできない全体、すなわち「自分という存在」を常にそ

の言葉の言外に感じ、それを「自分は」とか「僕は」とか「俺は」とかいった主語で表現している。須賀においても、その「自分という存在」はなくなってしまうわけではなく、ちゃんと確保されている（だからこそ、彼は「俺は」という主語を立てることができているのだ）。けれども、その後続く言葉が出てこない。名前だとか国籍だとかいった（彼にとっては）当たり前のことを除けば、「俺は〇〇だ」の〇〇に入る言葉が見あたらない。「俺は何なのか」と「自分という存在」に問いかけてはみるものの、そこからはやはり「俺」という言葉しか返ってこない。通常は〇〇という形で返ってくるはずの社会的意味がないのだから、「俺は俺だ」と言うしかない。まさに、「俺は俺だ」というのにそれ以上の「意味」はない。

以上のように彼の言わんとしていたことには、二つの側面があると思われる。一つは、すべての物事を決定するための支点となるべき「自分」が「ふらふら」してしまっているということ、そしてそれにも関わらずそれを「俺」という一つの言葉で言い当てるということの意味の無さ。もう一つは、通常「自分という存在」に纏われているはずのさまざまな社会的意味が欠乏しているために、全体として「俺」という存在の「意味」も希薄になっているということ。恐らくこの両者が密接に絡み合いながら、曰く言いがたい感覚となって、「『俺は俺だ』というのにそれ以上の意味はない」という言葉が導かれたのだ。

（『拡散』 p52-58）